

ふるさとの
かたりべ

第13集

発行 わがふるさとを探る会



ふるさとの かたりべ



〈藤の瀧（雌瀧）〉

〈表紙解説〉

金木町大字喜良市の集落から小田川をさかのぼること約七キロメートルの地点に藤の瀧がある。
雄瀧、雌瀧の二段の瀧を総称して藤の瀧という。
三方断崖絶壁で、春から初夏にかけてツツジ、藤が咲き乱れる景観から「藤の瀧」と名付けられたものと思われる。
金木町出身の作家太宰治の「魚服記」は、この藤の瀧（雄瀧）が舞台に設定されている。

雌瀧の高さは約三十メートル、この瀧の上流二キロメートルのところに多々良沢をせき止めて小田川ダムが建設されたのである。
絶壁の西側のせまくひらけたところから約二十メートル下流に雌瀧が落下している。雌瀧にくらべ半分ほどの高さでおとなしく飛沫をまき散らしている。唯、この雌瀧は道路側から見る事が出来ないため、藤の瀧が二段瀧であることは案外知られてないようである。

六十年ほど前には、嘉瀬小学校高学年生の歩き遠足の目的地は藤の瀧であった。その頃は雌瀧の高さはもう少し巾がせまく高かったような気がしたし、落下するすぐ右側の絶壁に木の梯子が垂直に懸っていた。腕白坊士たちは鏡つてその梯子を伝って瀧壺の傍の河原に下りて行って遊んだものである。河原には河鹿がコロコロと美しい声で鳴くのを見ることができた。

ダムが出来る前、夏の渇水期には、水量が少なくなり、小田川の用水を利用して水田耕作する嘉瀬地区の農家の人々は雨乞いの祭りをした。

瀧の上の少し広場になった小さな山ノ神の祠の前で、堰頭を先頭に数十人の農民が、ワラで作ったエンツコの中に、同じくワラで作った人形に白布を着せ、僧侶の読経で葬式を出し、瀧につき落すのである。泣き女の泣き声に参加者たちも一斉に泣き出す様は農民の死活問題が懸っていることでもあり迫力があつたという。

撮影者 金木町 企画室

巻頭言

発刊に寄せて



金木町長 鳴海 義 男

「わがふるさとを探る会」の皆様の研究成果の結晶とも言うべきふるさとの「かたりべ」第十三集が発刊されましたことに對しまして、心からお喜びを申し上げます。

本年に青森県では「文化観光立県」を宣言いたしました。この宣言文の中に、「……美しい自然景観だけでなく、ふるさとの先人たちが不屈の精神で創り上げた芸術・文学・郷土芸能・スポーツなどの数多くの貴重な文化遺産も私たちは畏敬の念をもって受け継いで行かなければなりません。……二十世紀が今まさに終わろうとする時、激動する時代のうねりの中で文明の恵みをほしいままにして来た私たちは失ったものの大ききにも気づきます。それは心の安らぎであり人間相互の信頼です。……」というのがあります。「わがふるさとを探る会」の活動は、まさにこの宣言文にある文化遺産を後世に語り継ぐことであると言えます。ふるさとの芸術・文学・郷土芸能などを探求、理

解し、後世に残すために住みよいふるさとをつくり、人と人との和が生まれ、信頼も築きあげられて来るのです。

このような意味からも、私は「わがふるさとを探る会」の皆様的情熱と行動力に対し、衷心より敬意と感謝を申し上げます。奇しくも今年には「太宰治没後五十年」でもあります。町でも未来永劫、太宰文学を後世に語り継いでいくための施設として斜陽館を修復し、太宰治記念館「斜陽館」として四月より開館しております。全国的な太宰ブームもあり、相当な太宰ファンが当町に御出でになるものと確信しております。今後は、これを核として更なる「観光立町」に努力する所存です。

最後に、津軽半島の中心にある我が金木町の歴史と文化の伝承のため、「わがふるさとを探る会」の皆様の一層の御活躍を祈念申し上げ、発刊に寄せる辞といたします。

かたりべ第十三集

目次

表紙解説 山中正津
カッター 木下清一

《巻頭言》 発刊に寄せて 鳴海義男

西海岸史跡調査めぐり 木村治利 1

〓特別寄稿〓 十和田神社について 佐野駒三郎 6

小田川去来 山中長三郎 7

旧暦六月二十三日 福部庵 比佐伍 16

嘉瀬今昔追憶の記 秋元 惣之進 29

〓特別寄稿〓 私の体験記 中西昭二 33

文 芸 (詩、短歌、俳句、川柳) 39

〓特別寄稿〓 金木町歴史探訪 成田 亀逸 50

〓特別寄稿〓 スキー場について 佐野 駒三郎 54

薬師コ流れ抄 山中 長三郎 56

嘉瀬郷倉事件 木村 治利 63

凶 作 木下 清一 68

津軽弁 村の笑い話 森 平

⑤	④	③	②	①
ハイヤーとタクシー	見当違い	シャンボ (石鹼)	乳は誰のもの	わら焼き 誤解
.....
81	53	52	49	15

会員名簿 編集後記

金木ライオンズクラブより表彰される

西海岸史跡調査めぐり

木村治利

平成九年九月十四日午前八時三十分、会員十一名（別記）を乗せ、金木町役場前を出発した。

今にも泣き出しそうな黒雲が、空一面覆っていたが、五所川原市に入り「乾橋」を渡ると、車内の華やいた空気に圧倒されたか、黒雲は次第に薄れていった。

ここから、国道一〇一号線に乗り西に向って直進する。

西側は、収穫を終えた西瓜やメロン畑が、延々と続いていた。

西津軽郡は縄文の古里と古津軽史の原郷である。屏風山地帯の田小屋野貝塚、亀ヶ岡遺跡（木造町）石神遺跡（森田村）は縄文時代の著名な遺跡の多い里である。中世の安東水軍、近世の北前船と日本海交易を支えた船々の行き交う湊として発展した西海岸は、歴史の哀愁とロマンが秘められたところでもある。やがて海岸が見え鯨ヶ沢町に入る。江戸時代青森港と並んで、津軽の藩米の積出港であった。又、ニシンの最盛期には漁港で賑わった。

太宰治はその著「津軽」の中で「私は深浦からの帰り、この

古い港町に立寄った。その町あたりが津軽の西海岸の中心で、江戸時代にはずいぶん栄えた港らしい。津軽の米の大部分はここから積出され、また大阪廻りの和船の発着所であったようだし、水産物も豊富で、この濱にあがったさかなは、御城下をはじめ、ひろく津軽平野の各地方に於ける家々の食膳を賑わしたものらしい（中略）鯨ヶ沢というからには、きっと昔の或る時期に、見事な「鯨」がたくさんとれたところかとも思われるが、私たちの幼年時代にはここ鯨の話は、ちっとも聞かず、ただハタハタだけが有名であった。」

種里城

赤石から赤石川の上流にのぼり、南金沢町を通って種里部落に入る。城跡は標高約六十米の丘陵部にあり、畑地や山林になっていたものだが、いまは整備され一面のボタン園となっていた。光信公が種里に入ったのは延徳三年（一四九一）である。

（津軽一統誌）、南部下久慈から三十六人の武将を率いて、入っ

たのは、南部氏に敗れて蝦夷地松前へ退いた安東氏が、旧領津軽の奪回を企て、幾度も兵を送ってくるので、それに備えるために派遣された。

当時の館は、築城年代など不詳だが、近年「光信公の館」として再建された。

光信公は、津軽平野の進出を図り、やがて山を越えて大浦（岩木町）へ進出、一城を築いて一子盛信公を置き、津軽全域平定の策を練ったが、大永六年（一五二六）十月七日没する。



光信公の像

ここで「光信公の姓は」……と考えさせられた。久慈から派遣されたときは、久慈光信でなかったのか。種里城に入り、南部光信を名乗り、大浦城へ進歩して、大浦南

部光信といわれているようだ。

津軽信政の自筆による津軽家譜草案によると、始祖金沢家光―家信―光信―盛信―まで全員源氏となっていないが、光信―盛信については江戸幕府は系図を史実と認定せず、とある。まして、光信―津軽為信に至っては、複雑極まりない。

津軽氏が、いっどこにおいて一族を起し、津軽為信の代に至ったのか、藩祖為信に到達する同氏の経緯、また為信一代の詳細な事跡すら確実な材料で確定することは容易でないといわれる。

深浦は、自然のメッカである。

四十キロメートルに及ぶ変化に富んだ海岸線は、そのほとんどが津軽国定公園区域に指定されており、私など、喜びにつけ、悲しみにつけ、この海岸線に訪れるが、その奇岩・入江・砂浜等、風光明媚な景勝に感動を覚える。又、深浦は古跡多く、歴史の重みのあるところでもある。

関の古碑群

板碑は四二基あり、県史跡に指定されている。

暦応三年（一三四〇）から応承八年（一四〇一）の時代の供養塔で、紀年銘と「安倍是阿」などの文字が刻まれている。

るので、安東氏と関係の深い板碑である。

安東氏は鎌倉末期の元亨二年（一三二二）～嘉歴三年（一三二八）にかけて一族の内紛が展開「津軽騒動」とか「津軽大乱」とかよばれる。

正中二年（一三二五）幕府は蝦夷管領職を又太郎から五郎三郎に改めた。それで紛争が起った。

両軍は、外ヶ浜内末部（東津軽郡内真部現在の青森市）と、西ヶ浜折曾関（西津軽郡深浦町大戸瀬附近の関である）に城を構えて洪河をはさんで（赤石川か岩木川）争った。

関の「カメ杉」の下にある板碑群は付近に散在していたものを集めたものといわれるが、暦応、貞和、貞治、永徳などの北朝年号のものであり「安倍是阿」「安倍秀□」などの銘が確認できるから、安東氏の一族がこの地にいたことは、間違いがない。

関の亀杉

樹齢およそ一、〇〇〇年の老木、鎌倉時代の将士の墓標といわれ、遠くから見ると亀の甲に似て見える（県天然記念物）

北金ヶ沢の大銀杏

鎌倉時代の老木で、樹齢およそ六〇〇年、古くから垂乳根（たらちね）のイチヨウとして崇拜され、妊婦が詣でると乳が出るといわれ、神木として根強い信仰を集めている（県天然記



関の古碑群

一本のイチヨウが、うつ蒼とした林を造り出し、垂れさがる
 気根（俗に乳）は種々の形をしていた。

円覚寺

深浦の観音さまといえば、円覚寺で知られている。

街の中枢部を過ぎて磯崎川を渡れば、うつ蒼とした
 兵陵を背負った古刹の山門に突きあたる。津軽三十
 三観音霊場第十番の札所ともなっている春光山円覚
 寺である。

円覚寺は、山の麓から中腹にかけて加藍が配置さ
 れている。荘麗な仁王門に入れば、境内は杉や銀杏
 の老木におおわれ、落着いた雰囲気を感じられた。

本堂左に金毘堂、右に薬師堂と柴灯護摩場がある。

元禄一三年（一七〇〇）建築され、大正九年（一
 九二〇）再建される。ご本尊は十一面観世音は聖徳
 太子の作と伝えられ、三十三年毎に開帳される。

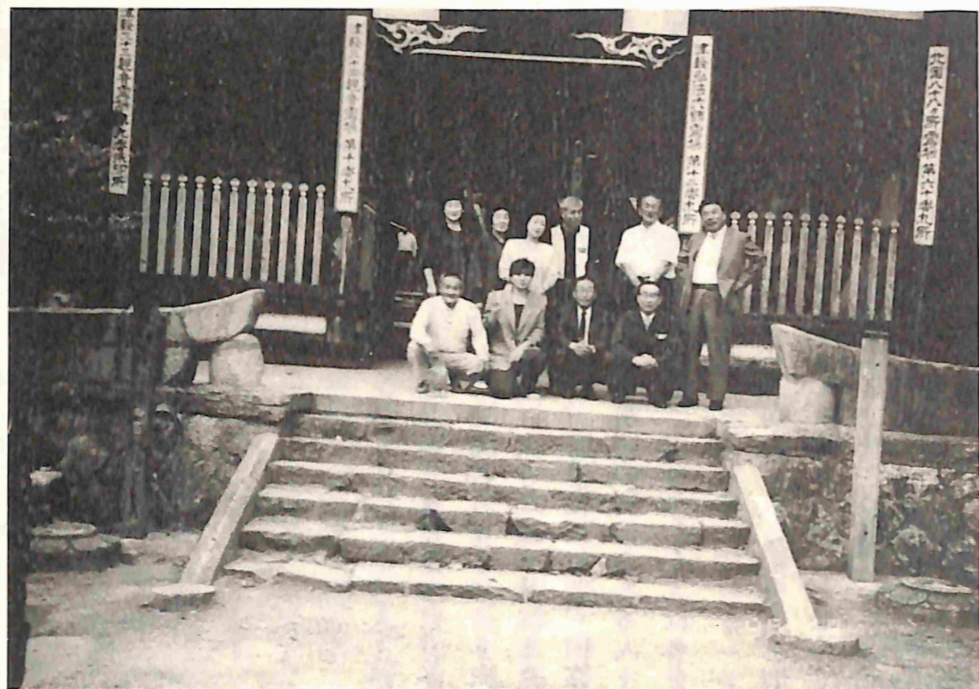
縁起によれば、大同二年（八〇七）坂上田村麻呂
 が開創し、貞観（八五九〜七七）のころ大和国の修
 験行者、僧円覚がこの地へ巡錫して草庵をむすび、
 観音堂を再興した。そして山号を春光山、寺号を円
 覚寺とした。江戸時代には津軽家の祈願寺となり、
 信牧（一六二五）、信義（一六五五）、信政（一七〇
 〇）、信寿（一七二八）がそれぞれ堂宇の修復をし
 ている。

古い寺歴、為政者の援助、深浦の観音として親し



関のカメ杉

関の覚杉と古碑群
 覚杉はこの地方を遊覧した
 菅江真澄の記録にも図示され
 覺の形に似ているので、うつけ
 られた。たちねの大銀杏と共
 に安東氏ゆかりのものか。推定
 樹齢は一〇〇〇年。
 樹下の古碑群は南北朝時代
 十四世紀安東一族によって建てられ
 北朝年号が刻まれている供養塔で
 付近の田畑に散在していたものを
 ここに安置した。
 阿弥号の人もあるので時宗の影響
 も考えられる。
 津軽深浦



円覚寺の山門前

む多くの人々、この霊場を支えてきたものは広く、厚い、檀家
 を一軒も持たない寺ながら、観音霊場として信仰あつい人々に
 守られているといえよう。

境内の薬師堂は永正三年（一五〇六）の建築、堂内の厨子は
 国指定の重要文化財、飛騨の工匠の作と伝えられ、白木造りの
 純唐様一間厨子、また日露戦争の戦死者の菩提を弔うために、
 前住職が制作した刺しゅうの釈迦大涅槃像がある。協賛者の八
 万四千人余りの毛髪が使われている。

この他、文明十九年（一四八七）平純久が奉納した懸仏、至
 徳二年（一三八五）在銘の鰐口が寺宝として保存されている。
 （何れも県指定重宝）

史跡めぐり参加者

秋元 惣之進	沢田 薫
石戸谷 恵子	沢田 サツ
小山内 トモ子	須崎 正敏
木下 俊藏	原田 万治
木村 治利	山中 長三郎
櫛引 八千代	